

『幼児の音楽』抄訳 2

Abstract Translation of Alice Green Thorn's "Music for young children" 2

アリス・グリーン・ソーン著 迫 共訳

要 約

アメリカの音楽教師、音楽家 Alice Green Thorn (1890-1942) による "Music for young children" (1929) の抄訳である。1935 (昭和 10) 年に米国コロンビア大学幼稚園師範科に留学した高森富士子 (1877-1968) らの訳により、教文館から訳書が出版されているが、元訳書は版が途絶えて久しい事などから、部分的に訳出しなおした。本書は第 3 章「リズム運動」と第 2 章「歌唱」に最も紙幅を割いている。第 2 章「歌唱」の抄訳を掲出する。

内容として、歌の社会的価値、歌唱指導、楽曲選択と提供の注意点、音楽経験の測定、音楽的遊戯、子どもの創作、進歩の記録と能力の検査などを含んでいる。

キーワード：米国、幼児音楽教育、幼稚園、発達、カリキュラム

1. 歌について

子どもはその生涯の初めから、音楽に興味を持っている。音楽のリズムや動作は非常にその心をとらえるのであるが、メロディーもまたほとんど同じく、その興味をそそるものである。子どもは単に音楽に興味を持つばかりでなく、音楽的であると否とにかかわらず、およそ身近に起こる音という音を喜ぶ。随分幼い頃でさえも、こうした音を聞くときは一生懸命にまねようとする。1、2 歳の幼児はよく、家族の人たちの話し声や呼び声を真似る。この年頃の幼児はまた戸外の音、つまり鈴の音や警笛や歌の聞きかじり、その他を真似る。遊ぶ時にはまた、ごく自発的に音楽的な声を発するものであるが、特にもしその遊びが、リズムにはまるものであれば、なおさらそうである。赤ん坊は言語をわかるように話し得るずっと以前に、既に人間の声の抑揚や調子やアクセントの変化などを口真似するのを、私たちはよく聞いている。子どもは私たちの言語の意味を知るずっと以前に、すでに声の言葉を聞き分けているのである。

歌を歌うことのできる能力は、世の中で最も愉快的な経験の一つである。歌を通じて自分の情緒を表現することは、誰にでも快くできる喜びでなくてはならない。知っている唯一のメロディーが、米国国歌「星条旗」(The Star Spangled Banner) であり、しかもそれが演奏される時に聴衆が起立して初めて気がついたというような人は、実に憐れむべきである。

今日の子ども達は決してこのようであってはならない。その生涯の始めから終わり

まで、豊かな潤いのあるものであるためには、この歌う能力を助長させてやらなければならない。

2. 歌の社会的価値

歌は子どもに他の人と愉快的経験を共にする機会を与える。大抵の人はグループで歌うことを好む。たくさんの人たちと一緒に歌うということは大きな満足を与えるものだ。大学の流行り歌などの普及を見てもこれが事実であることが認められる。この理を知っている団体指導者たちは、今も昔も集団の一致和合を増進する手段として、歌を使っている。

歌う能力は、自己表現のための別の手段を子ども達に与えてくれる。一般に、子どもが何でも実験するためには、まず粘土や絵の具または木片などの素材を手にとって、ある程度の熟練を積んだ後で、初めて自分の表したいことを表し得るのである。歌もまた、この素材の一種であり、子どもはそれによって自分の個性を表現することができる。ことにこの素材は常に手近であるから、方法としては実に申し分ない。子どもは自分の気持ちを表すのに対して、教わった歌によってすることもできるし、自分で創作してすることもできる。

学校あるいは家庭において歌う経験を積むことによって、子どもはいろいろの形の歌を覚えて楽しむようになる。また他の人の歌を聴いたり、また自分で歌ったりして、多くの歌曲を習得する。このようにして色々な異なった気持ちや経験を表した歌集を覚えて、自分がそれに似た気持ちになった時、また同じような経験に出会った時にいつでもそれを思い出して歌うことができる。

3. 歌唱能力の向上

歌う経験は、子どもにある種の技能を獲得させるもので、声の調子の取り方、あるいは呼吸の統制に関して適当に自分の声を使うことを覚える。明瞭に発音して気持ちの良い調子で歌い習う。また他の人と一緒に歌うことも習い、同時に団体の力を借りず、また楽器にも頼らないで一人で歌うようになる。子どもは、自分の歌のできばえを確認することで生み出し、習得した基準に従って、自分の声を批評し始める。

満4歳あるいは5歳で幼稚園へ来る子ども達の歌の経験や能力は、それぞれ大いに異なっている。4歳になってもまだかたことの歌い方をする子どももあれば、同じ歳で大人よりも上手とは言えないまでも、ほとんど同じぐらいに歌えるような子どももいる。子どもの正確に歌う能力は、異なる音程を聞き分け、様々な音程を再現する、あるいは調和して歌う仕組みをコントロールする正確さにかかっている。歌を習うにしても、また作るにしても、自分の声を、頭に描いている概念上の声に一致させることが必要である。ある子どもは長くて難しい音の組み合わせに完全に合わせられるが、

別の子どもは一つの音では正確に合わせられても異なった音を連ねた場合は全く合わせられないという場合もある。また子どもによってはひとつの音にさえも正確に合わせられない場合もある。この年頃の子どもの中でも、会話すると同様に、最も自然にまたのびのび歌うものがある。これらの子どもにとっては、歌うことは言語と同様、親しみ深い自己表現の媒体である。それに反して決してのびのびと歌わない子もおり、もしも歌ってと頼まれた際には自意識の苦痛にさいなまれる。

この能力の相違は色々の方面から説明できよう。歌の能力はある種の才能の遺伝から影響を受けることがある。その才能の中でも重要なものの一つは音の高低あるいは音楽的音調を識別する才能である。アイオワ大学のシーショア教授とその学生たちは、音の高低を感受する鋭敏さを測る方法を工夫した。それによって発見したことは音の高低を識別する能力の相違は非常に広大な範囲のものだということであった。何故ある子どもは上手に歌い、そして同じ歳のしかも同じような環境のもとにある子どもが、拙い歌い方をするかということも、かなり説明がつくことと思われる。

音楽の能力が皆異なっているもう一つの説明は、子どもの住んでいる環境による。もし家庭の雰囲気音楽的であれば、音楽の少しも聞かれない境遇の子どもよりは、より音楽的な傾向を持って成長する機会が多いわけである。保育園に来た満3歳になろうとしている子どもで、全く話すことができない者があった。その子は自分の思うことを身振りや奇妙な声で表した。母親が医師から、子どもを絶対に静かにしておくようにと命令されたので、これを文字通りに守った。実際子どもの周囲には全く音の刺激が与えられず、赤ん坊の頃から、母親や乳母はこの子のいるところではほとんど話をしなかった。この子が正確な音楽的能力を持っていたことは後に現れたが、学校へ入った時には話すことも歌うこともできなかったのである。

個々の音楽能力の差異について、ことに幼稚園時代の子ども達にはその原因となる要素が他にもある。多くの子どもは幼稚園に行く時、初めて学校の経験に入るので、音楽に対する理解に欠けているように見えることは、まさに彼らに期待されていることへの無知に原因している。このような種類の子どもは、園生活に慣れれば、直ちに音楽に非常な進歩を見せるようになることがある。注意の範囲がどの程度であるかは、子どもの音楽的反応の性質を決定するものであるが、神経系統の安定度や、また歌うための身体のしくみ、そして子どもの全体的な健康状態が相まって大きな原因となっているのである。

4. 歌の教授

学校や家庭において子どもに歌唱の経験を与えることについて、第一に考えたいことは、子どもがその経験で満足と楽しみを得るように、ということである。第二には、美しい歌を知って鑑賞できるように。第三には、個々の子の歌い手としての技術がし

だいに増すように。第四には、子どもが歌を自己表現の媒介として利用することに慣れることである。

母親にしても教師にしても、子どもの歌唱の経験を満足に教え導こうという人は、必ず自分自身、歌うことのできる人でなければならない。そして歌の調子を正確に歌うことができるとともに、その音声も気持ちのよい質のものでなくてはならない。歌詞も分かりやすく歌い、子どもを相手にする時に見かけられるような、わざとらしい態度は避けなければならない。小さな子はまず母親や教師を観察し、次にその真似をするもので、いわゆる、そらでおぼえた歌い方をする。子どもは音程のつながりや歌詞を真似るだけでなく、音程の質や呼吸のコントロール、顔の表情、その他独特の癖までも真似る。子どもに向かって音程の取り方や音程の質について話してもほとんど何の役にも立たない。だから子どもに歌う時の良い習慣を習得させようと思えば、私たち自身がその良い習慣を持っていなければならない。教師や母親の取るべき良い方法は、自己批判のために鏡に向かって歌い、また音程が不正確と思う場合には、音楽が得意な知人に聞いてもらうことが大切である。もしその知人が率直で、音楽的能力においても頼りになるなら、その経験から多くの助けを得ることができよう。

教師や母親は、歌の材料を学んで知っておく必要がある。子どものための歌集の本はたくさんある。実際たくさんありすぎるので、小さい子どもに用いる歌を選ぶには、識別の力を要する。これならば全く申し分のない歌集であるとして、一冊の本を推薦することはできない。良い歌は多くの本の中に散在しているようであるから、種々の本の中からいくつかを選び出すのが最善の方法であろうと思う。時間と費用を節約するために多くの教師たちはタイプライターで打った本に、それぞれのクラスに応じた最も良い歌ばかりを集めて、便利にまた使用しやすい形にしている。

多くの材料の中から歌を選ぶにあたって、まず考えなければならないことは、その歌を何の目的のために使うかということである。歌は気持ちの表れであるべきであるから、巧みに選択するには子どもの興味や経験や、それに伴う気持ちを知らねばならない。この興味や経験というものは集団の場所によって種々多様な変化がある。歌に表された幾多の経験の中で、ほとんどどれにも共通のものは、マザーグース、人形のおねんねの歌、意味のない文句を連ねた歌、調子のいい文句、クリスマスや他の祝祭日の歌などである。どんな地方にも共通な経験を歌った歌もいくらかはある。しかし、都会の子どもにのみ共通な経験を取り扱ったものもあれば、郊外または田舎の雰囲気の中に育った子どもに適した歌もある。次の類別は幼稚園や一年クラスの子どもの喜びそうな大概の歌を含んでいる。

5. 歌の種類

お祭りの歌：お祭りの日の子どもの喜びを取り扱ったもの。例えばクリスマス、バレ

ンタイン。

戸外の歌：自然界の経験に対する子どもの反応、例えば雪遊びの面白み、春の楽しみ、夏の楽しみに対する期待。

子守歌：母親の愛情、心遣いなどを表した歌で、子どもの人形に対する感情の中に反映されるもの。

動物や鳥の歌：この歌の大抵は物語の形になっていて、動物や小鳥のしていることなどを歌っているもので、子どもに興味のあるものである。

人とその活動についての歌：この種の歌は、子どもの周囲における人々の行う面白い活動、例えばボートを漕ぐとか汽車に乗るとかいったようなもの。

あいさつの歌：友達に会った時の嬉しさを表す歌、例えばクラスに出ていなかった子どもが帰ってきたとか、あるいは誕生日を迎えた子どもへのお祝いの挨拶など

意味のない歌：これらの歌は空想的で事実でない経験に対する、子どもの喜びを表している。この種の歌は聞きなれない言葉を何度も繰り返したり、また動物を擬人的に取り扱ったりしているところにその特徴がある。マザーグースー子どもは、そのような歌のおなじみの言葉と同時にその曲のリズムも楽しむ。

賛美歌：賛美歌の多くに現れた情操は、概して自然的に子どもらしい感情の表現ではない。しかし、子どもも経験した鑑賞できる状況を表したものもいくらかある。

子どもの為には選ばれる歌は、子どもの経験や情緒の表現でなければならない。感傷的であったり、象徴的であったり、また大人の情緒を表したものであったりしてはならない。子どもの歌で実は大人が子どもに、このように感じて欲しいと願っているもので、事実子ども自身がそう感じていない感情を表現しているものも多い。この種の歌で最も適切な例証は、最近、音楽教科書の中に出た「リンカーン・ペニー」というものがある

私は1ペニーは大して価値あるものとは思わない。でも子どもはそれを大切そうにする。なぜなら親切で清いリンカーンの顔がそこから見えているから。

普通の子どもならば1ペニー貨を見ても、とてもこのような情緒を感じることはない。またもしある人がリンカーンに対する尊敬心を教えたいと思っても、このような技巧的かつ非芸術的な方法を選ぶことはないだろう。自然界の歌の中でもこの部類に属するものが多い。

子どものために選択された歌はその思想を単純に、短く、しかも詩的に表していなければならない。歌詞は譜面から切り離しても、短い詩としても用いる値打ちのあるものであり、従って文学的価値を有していなければならない。

6. 楽曲選択と提供の注意点

歌のメロディーはリズムックで、面白いものであってほしい。メロディーを面白くするためには、音は特に巧妙に、また独創的に配列されていなければならない。短くなくてはならないが、強いリズムックな印象を欠くほど短すぎてもいけない。長い歌であっても、もし繰り返しの多いものなら使っても良い。メロディーは子どもの歌いやすい音程例えば音階の中の 5-3 5-8 5-1 2-6 などのような音程を含んでいなければならない。他の調へ転じたり難しい半音を使ったりしてはならない。

一つの言葉は一つの音で歌うのでなくてはならない。もっとも、言葉によっては子どもが話す時に経験するように、自然に二つの音で歌うのが適当な場合もある。一つの言葉をいくつもの音にわたって歌うのは普通の会話とはあまりかけ離れているので、呼吸のコントロールを難しくし、また歌うにも難しくなる。歌の高音は全て広開口母音で歌わねばならない。

子どもの声の範囲は中央の C の上の E から 1 オクターブ上の E あるいは G までに渡るべきものである。歌の音はこの範囲に限られねばならない。子どものために書かれた歌の中に、あまりにも調子が低くて、もっと高い調子にしなければならないものが多い。歌うときも演奏するときも常に同じ基音でなければならない。

歌の楽曲は歌詞によって起こる感情を表現するものでなければならない。真に芸術的な歌とは、歌詞が曲を補い、曲がまた歌詞の意味を一層強めているものである。楽曲は歌詞なしに演奏しても、歌詞で表現されている同じ感情を起こすものでなければならない。歌のそれぞれの部分は、同じ観念を表す完全な要素であるべきだ。もし私たちがこれらの規範に心を留めて、細心に歌を選ぶならば、その歌こそは子どもの音楽的な記憶の中に役立つものとなるだろう。

歌というものは実際の経験をしていて、その気持ちが最高潮に達している時に教えなければならない。例えば汽車についての歌は、現に積み木の汽車を作り、それに乗っている時に伴う感情の表現でなければならないので、できるならば歌はその時に教えた方が良い。そうすればその歌は一層意義あるものになる。

クラスの全体の子どもがよく知っているものでも、同じ時に全員には起こり得ないような経験もある。このような経験を叙述した歌を、クラス全体が習おうとする時には、物語にしたり絵を見せたり、また話し合いをしてその経験を思い起こさせるのが良い。

小さい子どもの歌はそらおぼえさせて教える。教師は歌を途中で打ち切ったりしないで全部歌って聞かせ、それを聞き終わってから子どもにメロディーや歌詞を再現させる。この時の歌はピアノの伴奏をつけない。歌を習うには主としてメロディーに重きを置くべきである。伴奏の和声は初めの間は子どもに紛らわしく、注意をそらす。メロディーを覚えてから後に伴奏を加えれば、別に気を散らすこともなく、かえって

興味を増すことになるだろう。

歌は子どもが正確に歌うようになるまで、何度も歌って聴かせねばならない。歌が面白い時には、子どもはすぐに教師について歌おうとするが、できるならば子どもが歌ってみる前に、3、4回先生が歌うのを聞いた方がよい。注意して聞くということは実際の発声と同様、歌を習うのに大切な要素である。しかしまた、子どもがすぐに歌ってみたいと思うことがある。そのような場合、子どもを無理に待たせると、興味を失ってしまうものである。この年頃の子どもには、すぐにその歌の仲間入りをさせる楽しみを与えるべきである。たとえそれが最初は歌のただ一部分だけを教師と一緒に歌うというだけでも良い。教師が歌の全体を歌えば、子どもはその中の一番やさしい一節とか、一番面白いと思う一節とか、あるいは最後の一節とかを歌っても良い。こうすることは歌を聴いている間、子どもの興味をつなぐ助けともなる。数回その歌を聴いている間に、いつとはなしに歌の全体を歌ってみることができるようになるだろう。

私たちは子どもの学校における活動の、あらゆる方面に関して各々の間に相違を発見するが、音楽における才能の相違の範囲は、他のいずれの科目よりも甚だしい。例えば手工では、大概の子どもはある標準のもとに集められ、互いの中に大した差はない。幼稚園で普通の大人ほど巧みに船を作る子どもがあったとすれば、よほどの例外であろう。しかし幼稚園の中でも歌の差異にかけては、普通の大人よりも優れた者もいるのである。

7. 子どものこれまでの音楽経験を測定する

それぞれの子どもが今までにどのような音楽的経験を持っていたか、ということを確認してみるのは大切なことである。この種の報告を得るにあたっては、親たちは喜んで学校に協力してくれる。この報告を得るのに便利な方法は次のようなカードを親たちに配布することだ。この質問は図書用カードを使って、わずかな費用で複式印刷にできる。次に掲げるカードは一つの方法の提案に過ぎない。カードは子どもが学校に入る時、すぐに配布して親たちに記入してもらおう。このようにすれば子どもの音楽的背景について公平な見解が得られ、同時にこの報告によって子どもの音楽的才能と要求に関して、より完全な審査をすることができる。

氏名 _____ 年齢 _____

- 1 歌の節を正しく歌えるか
- 2 どんな歌を一番多く歌うか
- 3 自分でメロディーを創作することがあるか
- 4 同じメロディーを同じように繰り返して歌うか、あるいは歌うたびに違っているか
- 5 家族の誰かが歌うか
- 6 家族の誰かが楽器を弾くか
- 7 どんな楽器を子どもは聞いているか(線を引いてください) ピアノ、蓄音機、ラジオ、ヴァイオリンその他
- 8 備考

子どもの音楽的趣味、環境、あるいは遺伝等について、他に報告すべきことがあれば、裏面に書き記してください。

クラスの子の、それぞれの歌の才能を年の初めに速やかに確かめておくこともまた、大変重要なことである。これをするのに色々な方法がある。子どもの名簿を作り、これを室内の、確認するのに便利な場所に掲げておく。多くの子どもの歌の才能はその遊びを観察している間に確かめることができる。子どもは室内で遊びながら、よく歌を途切れ途切れに歌う。また教師が頼めば喜んで歌う子どももいる。私たちが歌って聞かせてから、それを子どもに繰り返させれば、応じる者もある。子どもが朝学校に来て、一人ひとり教師に挨拶する時に、それを会話調にしないで、歌うようにしてもよい。また毎朝出席簿を読み上げる学校では、子どもは歌で答えることを喜ぶかもしれない。

短い歌でも恥ずかしがって歌わないような子どもも多くいるが、調子合せを劇的な遊びと結びつけていると、そのような子も応ずるようになるだろう。例えば汽車の車掌が「発車用意」と全く無意識に一つの調子で歌い、機関士は汽笛のピーという音かベルのジャンジャンという音を真似て応ずるようにするのである。もし教師に手腕があり、学校の環境内で起こる音楽遊びを試験の基礎として用いるならば、今述べた汽車遊びの方法や、これに似た手段によって实际的にクラスのあらゆる子どもの音調に合わせる能力を見出せる。教師は、これをすぐ表に記入したほうがよい。単なる記憶は薄れやすい。確実な方法は、手早く記入できる表を手近に置くことである。

8. 組分けの方法と指導案

平均的なクラスにいる子ども達を、三つの小さいグループに分けることができる。第一に、調子を正確に合わせられる子ども。第二は、大体調子の間近まで来ていて、よく似ているが、しかし正確ではないもの。第三は、調子を少しも正確に合わせることができないが、音の高度の区別はいくらかわかると思われるもの。ともかく、実際に反応をなす子どもは、全員以上の三つのどこかに入れて良い。ついでに述べると、「一本調子」という語は幼稚園や一年クラスの教師が使う語彙の中から取り除いてしまわねばならない。この年頃の子どもを決して、一本調子などと呼んではならない。我々はかれらにそんな名をつけるほど、まだ十分にその歌の能力を確かめていないからである。

一本調子は実際、多くの子ども達の中のほんの少人数だけである。一番下のグループの中でさえ、全部の子どもが音の高低の違いを知っていることを見る。これらの子どもも最初の反応の時よりは、その次の時にはより高くあるいはより低く歌うことができる。もし少しでも、音の違いが感受できたなら、その子は一本調子とは言えない。私たちの会話の声には抑揚があるが、その語気の変化に伴う語調に合わせられる子は、当然歌うことを学び得るはずである。

一本調子という烙印を押された子どもに助力を与えることは、無駄であると考えられてきた。実際これらの子どものある者は、音の高低を識別する能力がわずかしかない。しかし、何かの理由で学年の最初にはその能力を表し得なかったということもあり得る。はにかみや発声器官の不調節、理解の欠如または家庭の状況が音楽的でないことなどが、子どもが正確に歌うのを妨げる原因となっている。子どもによっては何によらず反応することを嫌がるものもある。そのような子どもに対して、あまり無理強いしすぎてはいけない。かえって不幸な結果を招かないとも限らないからである。子どもの歌に対する興味を持続させようと思えば、歌の経験に対して、常に子どもに満足を与えなければならない。年の初めに歌うことを拒んだ子どもの多くも、環境に親しむにつれて、後には全く自然に歌うようになるものである。

教師は学年の第2週目の課業の終わるまでには、クラスの大部分の子どもの歌の能力を発見し、これを記録に書き留める機会があるはずである。普通の幼稚園の組においては大多数の子どもは上の部に属し、中の部にはそれより少し少なく、さらにより少数の子どもが下の部に属するであろう。次の表は幼稚園において4年の継続期間中に、各々の学年の初めにおける子どもの類別を示したものである。

年次	上の部			中の部			下の部(一本調子でない)		
	女子	男子	合計	女子	男子	合計	女子	男子	合計
1924	11	11	22	10	16	26	1	8	9
1925	18	15	33	5	9	14	2	7	9
1926	13	11	24	12	3	15	6	8	14
1927	22	22	44	5	5	10	0	6	6

教師が自分のクラスを少人数に分けられたら、その年の仕事をするための一つの業務上の基礎ができたわけである。分類された子ども達は皆それぞれの能力に従って、適当な歌を与えられ、そしてそれぞれの歩調で歩むことができる。もっとも教師は、1週に2回または3回は異なったグループに別々に教える機会がなくてはならない。

教師は皆、一人一人の歌の能力に従ってクラスの評価ができる。しかしこの小さいグループ分け教授法を、日々のプログラムに当てはめようとする時には、多少の問題が起こってくる。これらの困難を次に表示し、それに可能な解決法と提案とを付け加えておくことにする。

- 1.ある幼稚園では、教師が一人しかいない。この場合、例えば第三グループの歌唱指導をしている間、他の二グループをどうすればよいかは、教師にとって難しいことである。
- 2.ときどき、非常に小さい部屋に、大勢の子どもが混み合っていることがある。小さい部屋ではたとえ教師に助手がついていたとしても、多人数の子どもを二つの組に分けて同時に歌唱を教えるということは困難である。
- 3.一番下のグループの子どもは自分達だけで歌っているのは、もっと上手に歌える子ども達とともに歌うことによる感化を得る機会がない。従ってこの子ども達がもし自分の仲間の者とばかり歌っていたならば、始終下手な歌を聴いていなければならない。
- 4.全部のグループにそれぞれ適当な歌の材料を見出すことは容易なことではない。
- 5.もし幼稚園の音楽が、音楽主任の管轄のもとにあるならば、子どもに適当であるなしに関わらず、指定の項目で歌うことを要求されるかもしれない。
- 6.科目及び日々のプログラムは、既にいっぱいであり、教師にとっては時間外にまた音楽のために時間を取ることが困難であろう。
- 7.一番下のグループの子どもは、時には自分達の歌の能力が、他の子ども達に劣っていると感じさせられて、失望することがある。

第1と第2の困難は、管理上の課題に属する。次に掲げるプログラムは、このタイプの困難を解決するのに役立つことが証明されており、現在多くの幼稚園で実際に使

われているものである。下の表は、小グループでの歌唱を続けられる場合に向けて作られた提案である。

第一案 教師 1 人—園児 30 人 8 時 30 分から 11 時 45 分まで

時間(分)	課業の種類	小グループ歌唱の時間
15	<ul style="list-style-type: none"> ┌ ままごと遊び ├ 玩具を持って遊ぶ └ 絵本を使う 	<ul style="list-style-type: none"> ┌ ピアノの周囲で一人一人についての試験 └ をしたり、随意に歌わせたりする
15	<ul style="list-style-type: none"> ┌ 会話の組 ├ 本を見る └ これからする課業の話し合い 	
60	美術、手工	
30	弁当、休憩	
25	戸外の遊びと遊戯	小グループ分け歌唱
15	童話	
30	室内の遊戯と音楽	小グループ分け歌唱
5	解散	他の組は自分たちだけで作業をする

この方法では小グループの歌を正規の課業の始まる前にすることを提案した。この時間には子ども達は、玩具を持ったり本を見たりして忙しくしており、教師は少人数のグループをピアノの周りに集めて、一人ひとりに助力を与えたり、新しい歌を紹介したり、個々の子どもにテストをすることができる。教師もまた戸外の遊びの時間中、他の子ども達が遊びに夢中になっている間に、ときには1つのグループだけを集める機会もあると思われる。この種の幼稚園では、子ども達はたいてい、他の幼稚園の子どもより独立心に富んでいる。これは教師が1人しかいなくて必要に迫られるためにそうなるのであろう。だから教師は、1つのグループには子ども達自身でできるような一定の課題を与えておいて、その間にクラスの他の者について教えることができる。先に掲げた例は全て試験済みであり、また実際に役立っているものである。もちろんこれは熟練した教授法を必要とするが、もし小グループの歌の課業を形式ばらず、時間も短く、また度々行うならば、たとえ担任教師が1人しかいなくても、必ず立派な成果をあげられるだろう。

第二案 教師 2 人—園児 40 人 8 時 40 分から 12 時まで

時間 (分)	課業の種類	小グループ歌唱の時間
60	課業の時間—材料を用いて	小グループ歌唱
30	材料の後片付け	
	話し合い	
25	弁当	
10	休憩	
30	音楽—リズムと遊戯	
30	童話—歌	
15	戸外の遊び 解散	

小グループ歌唱の方法は、教師の 2 人いる幼稚園ではたやすく具体化される。1 人の教師が 1 つの小グループを教えている間、他の 1 人の教師は他の子どもを受け持つことができる。もし部屋が小さいため片方のグループの歌が他方を妨げるようであれば、もう 1 人の教師は、歌っていない子どもを連れて見学に行くとか、あるいは戸外に出て、遊戯などをさせることもできるだろう。

第三案 教師 4 人—園児 60 人 9 時から 12 時まで

時間 (分)	課業の種類	小グループ歌唱の時間
15	靴を履き替える	一人ひとりの歌唱
	家事—花活け	最下組の子どもを集める
	—植物に水をやる	
	—動物に餌をやる	
50	美術 手工	小グループ歌唱
10	材料の後片づけ	
15	小グループの集まり	
	童話—話し合い	
30	弁当	
15	休息	
30	音楽	
30	戸外の遊び見学 あるいは必要に応じてさらに 音楽もする	

クラスは上位のグループが1つ、中位のグループが2つ、下位のグループが1つに分かれる。このような状態の幼稚園では、教師の数や教室の大きさ、また設備と環境によってプログラムをいかようにも適用させることができる。

先述の第3の困難は、容易に避けることができる。子ども達全員がその能力の如何にかかわらず、皆で一緒に同じ歌を歌わなければならないことも度々あるからだ。クラス全員に共通した経験を表したクリスマスの歌や、子ども達全員が嬉々として楽しい遠足に行つて思いついた歌などは、クラス全員で歌わなければならない。そのようなときには下位グループの子ども達も、上手な人たちと歌う楽しさを味わい、感化を受けるものである。

第4の困難は、本当に難しいことである。子どものための歌で、メロディーもよく、表題もまた面白いというものの多くは、歌うことが非常に難しい。一方また、易しい歌はそれだけ表題もつまらないし、メロディーも面白くない。これは数年前まで、読書材料が欠乏していたときの事情によく似ている。普通小学の本が、易しければ易しただけ、たいていはつまらないものであった。今私たちが大いに必要とするものは、芸術的な形式を備え、面白い内容とメロディーを持ち、そして子どもの歌う力に相応している材料である。

第5の困難は、ときには幼稚園の音楽は、音楽主任の監督のもとにあつて、しかもその主任が、自分で規定した目録の中から歌を選ぶことを望むことも、ままあることだ。しかしもし、幼稚園の教師が確信を持ってどうしてある種の変化と適応が必要であるかということについて正当な理由を述べれば、主任も十中八九は喜んで協力されるだろう。

第6の困難は、時間の再編成の問題である。もし音楽が価値のあるものならば、他の項目に劣らざる考慮を要する。特に幼稚園時代において正しい様式の音楽教育のために時間をかけるという事は、重要なことである。初期にできた習慣は、子どもの学校生活にも永続するものである。形式的学科目の重圧がさほど厳しくない、幼稚園時代において、正しい習慣をつける時間をかけることは、将来の多くの時間と労力を節約することになる。

第7の困難について、教師やあるいは音楽主任さえも、ときにはこれらの最下級の子ども達をいかにも劣等者としての烙印を押すような名称でそれぞれのグループを呼ぶことがある。例えば最上のグループを「ウグイス」と呼び、最下級を「スズメ」や「カラス」と呼ぶことがある。幼稚園の普通の子供達は、このような名称の意味をただちに理解して、このような無分別で残酷なやり方にたやすく影響される。最下級の子供は、自分達よりも歌の才能のある子供の仲間から全く除外されることがしばしばある。このグループに提供される歌の素材は、子ども達の直接の興味や経験からはるかに遠い、つまらない音の練習である。したがってこの子供たちは歌に全く興味を失っ

てしまうだけでなく、歌おうとすることさえも嫌がるようになるのも無理はない。

このような事は遺憾である。歌を教える上での最大の目的、つまり歌を愛好し、また歌うことに対する憧れの心が盛んにならねばならないのに、その事まで台無しにしてしまう。実際に何を教えるにしても、子どもの興味を賭けてまでもテクニックの養成に重きを置くような方法は避けなければならない。

子どもを歌唱の能力に従ってグループ分けするという方法は、そもそも教師が、そのクラスにおける子ども一人ひとりの欲求にあわせる努力の結果として生まれたものである。この方法の大きなメリットを以下に記す。

- 1.子どもが1人で歌う機会や教師から個人的な助力を受ける機会が多い。
- 2.子どもは単に面白いものだけでなく、自分たちの歌の能力に適した材料を与えられる。
- 3.人数が少ないので、大きなクラスでは得られない、多くの個人的な音楽経験を持つことができる。
- 4.教師は音楽上の多くの悪い癖が増大していくのを防ぐことができる。この癖は子ども自身に大きな障害であるばかりでなく、1年クラスの教師や音楽主任にとって非常な難題の原因となることもある。
- 5.教師は子ども一人ひとりの達成や興味を、より多く意識して、クラスの進歩に注意することができる。

このような方法には、教師の手腕と時間が必要である。また1グループにあまり多くの子どもを入れてはならない。編成の才と楽才も必要である。とりわけ教師は、そのクラスの音楽の必要性を意識し、また子どもを達成し得る最高のレベルまで助けてやるだけの熱心な強い希望を持っていないと行かない。

子どもを小さなグループに組分けして、選んだ少人数に歌を教えるという方法をとることは、同時にクラス別の材料の選択という問題も含んでいる。

普通の幼稚園のクラスでは、大多数の子どもは最上のグループに属している。入園期の始まりにおける上位グループの子どもは音楽的特徴は次のようである。

- 1.短い簡単なメロディーを歌うことができる。
- 2.グループで歌った経験が乏しい。
- 3.音の連続つまり音階に対してわずかな観念しか持っていない。
- 4.声の質は時々不快で耳障りである。
- 5.歌詞を歌うことの面白さにつれて、メロディーのリズムを忘れるので、ともすれば楽節の終わりで小節の長さを縮めてしまう。
- 6.長く引っ張った音を歌うことができない。
- 7.聞き分けられる音の範囲が短い。
- 8.楽器や他の人の歌に頼って歌うことが多いので、1人で歌う経験を必要とする。

このようなグループの子どもは、年の初めには多くの簡単な短い歌を必要とする。歌は音と関わる遊びの経験から生まれる。歌うに適した時は、その遊びをしている時である。この方法によって、子ども達は大勢で集まって歌う前に、少人数で歌うことを覚える。大勢で歌うことができるようになるより難しい歌を習っても良い。最上位の者が、学年が進むにつれて、用いる歌の選択の問題は別に難しい事はない。なぜならば単純なメロディーを歌えるほどの子どものためにはいくらでも歌があるからだ。

ときには最上位の子どもが歌の難しい部分を歌い、最下位の子どもが簡単な方を歌うということにしても良い。このようにすればグループの全体が、それぞれ自分の程度に応じて歌の経験に預かることができる。エレノア・スミス著の『歌の工夫と反復』は、問いと答えになっているから、この方法に従うのも良い。最上位はまた学校の集会などのような特別な機会に歌うのも良い。ただしクラスの残りの者が他のことを受け持てるようにして、歌に加わらないことが目立たないようにすべきである。上位グループの子はまた、時々自分でメロディーを作り出すことができるし、教師の助けをかりて、それをピアノや木琴で弾くことを覚える。小学1年クラスの子どもの音楽授業を見学するのも良い。また下位の子はその間、自分たちの先生について、何か面白い音楽経験を持つということにするとよい。最上級の子どもはその才能に適した材料を必要とするが、教師の時間をこのグループだけで占有してはならない。最も細心の助力と特別な扱いが必要なのは、むしろ下位グループの子ども達である。

9. 歌えない子を手助けすること

中位と下位の子どもはできるだけ多く、また最善の教えを受けることが必要である。この多くの子どもの音楽に関する将来は、幼稚園と1年クラスにおいて決められるものである。この子どもの多くが歌えないというのは、何も天性の音楽的能力に欠けているためではなく、内気なため、または音楽的経験の欠如から理解に欠けているということを私たちは知っている。この子たちに最善の教授を施すのは、教師の特権であるだけでなく、義務でもある。この子たちの音楽経験は最上位の子どもと同様に、どこまでも興味に満ちたものでなくてはならない。

下位の子どものための音楽材料を見出すのは難しい。最近数年の間に、多くの歌の作者は子どものための短い簡単な歌を作ることに努めた。あるものは役だったが、また興味を欠いているものも多い。出版社の要求に沿うため、あるいは一冊の本の何ページかを満たすために一定の数の歌を作らねばならなかったに違いない。今日私たちの有している最もうるわしく最も芸術的な歌は、民謡である。これこそは私たちの共通な現実的な経験の表現である。不幸にしてある民謡は英訳されて、本来の魅力を失ってしまった。教師は子どものために、これらの民謡の中でも翻訳によって損なわれなかったものや、また不適当な英語の歌詞までも付け加えて不都合な改謬を加えたり

していないものを選んでやるべきである。

下位グループの歌の経験は、その子ども自身の環境における経験そのものから生じてこなければならぬ。以下は、多くの教師によって提案されたものである。このような経験の価値は、グループからの要求にも大きく関わる。

10. 音楽的遊戯

- 1.一人の子が室内や運動場の一角に隠れる。他の子ども達は目を塞いでいる。次に教師か別の子が、隠れている子の名を歌うと、その隠れている子は同じ調子で歌って、それに応える。最初に歌った子が、返答の声の出る位置を頼りに、隠れた子を探す。呼び声は、最初は簡単にして次第に難しくする。子ども達がこのゲームの経験を積むと、後には自分たちで呼び方を作り出すのを楽しむようになる。
- 2.子どもが円を作って座る。一人の子が目隠しをする。教師の選んだ別の子が目隠しをした子の後に行き「私は誰？」と歌うと、その子は同じ音調でこれに応える。この歌う遊びの前に、子ども達はお互いの話す声を聞き分けるように練習しておかなければならない。
- 3.教師はクラスの子の名前を歌いながら読み上げる。子どもは同じ音調で歌ってそれに応える。
- 4.ある子どもが楽器の音色とその演奏の真似をすると、他の子どもはその楽器の名前を当てる。
- 5.子どもが丈夫な紙でラップを作るか、メーリングチューブ（郵便物を入れる筒）を使ってそれを鮮明な色で塗る。このラップは、色々な遊戯や音調の遊びに素晴らしい機会を提供する。

教師あるいは子どもが、一つの問いを歌う。別の子が同じ調子で答えを歌う。この歌は、最初はひとつの調子で歌い、その遊びが日々進歩するにつれて音の高低にいろいろ変化を与えるという風にする。歌の音程は3度または5度といった慣れたものにする。

学年の終わり頃には、この質問は、簡単なメロディーで歌うと良い。先述の『歌の工夫と反復』の本の中の歌は、これに関係して用いれば価値が多い。

劇的な遊びと関連する音は、最下級の子どもには良い音楽的材料を提供する。子どもの音楽的経験は汽車遊びをして、数人の車掌が高い調子で駅の名を呼び、「乗車」とか「降車」とか叫んだり、駅の売り子が品物を売り歩く声、例えば「アイスクリームはいりませんか」などという形式をとっても良い。このような遊びや遊戯は子どもに愉快さを与え、発声に対する興味をそそるならば、有効である。音の遊びをしている間に、訓練によって子どもの興味を妨げてはならない。子どもが音楽的経験に不快な連想を抱くよりは、むしろ歌の能力が同じレベルに留まっている方がよいだろう。

教師は表に、二つの下位の子ども達の進歩や、歌う機会の回数などを書き留めておくといよい。子どもが一人で歌う機会が多くなるほど、進歩の機会も多くなる。子どもは心で聞く音を、その通り発声できるようになれば、その時初めて進歩が見られることになる。

11. 子どもの創作

大抵の子どもは皆、自分で作り出した歌を歌うことを喜ぶ。赤ん坊はまだ話せない前からすでに歌うことがある。赤ん坊の歌は、よく耳にする子守唄に示唆されるのか、繰り返し歌（チャンティング）や小声での歌に似ていることが多い。幼い子どもの歌はたいてい形も整っていないし、リズムもない。4、5歳の子はよくある経験を歌にするが、その歌はちょうどお話でもしているように、物語のような形式で現れてくる。

自分でメロディーを作るという子どもの創造的な試みは、彼らの音楽的発展においてもっとも重要な段階である。子どもの歌は粗雑かもしれないが、その歌は確かに育てる価値のある創造的な表現への関心を示している。子どもはこのように音で実験することを薦められるべきであり、この種の音楽的経験にもっと多くの時間をかけるべきである。

子どもがたくさんの感動を受けてからでなければ、子どもの表現を受け取るとは期待できない。だから私たちが子どもに応答の準備として、多くの経験を与えることが重要である。準備として、短い文章の歌や、「四月の雨は五月の花をもたらす（“April showers bring May flowers.”）」や「ゴーン ゴーン 鐘がなる 子猫が井戸に落とされた（“Ding dong bell, pussy’s in the well.”）」のようなリズムの決まった短い歌を歌うことを子どもは学ぶべきである。このような歌は、パートのバランスが取れた短い音楽の形式や、始まり、中、終わりがある音楽的なパターンを子どもに示すものとなる。

子どもは、これらの曲を一人で歌う機会を持つことで、音楽的表現への落ち着きや自由感を身につける。子ども達に、これらのメロディーを楽器で演奏してみる機会を与えると、音階の中の音調の関係について、理解を得ることができる。気分が盛り上がった時、子どもは、自分自身を表現する準備が整う。子どもの歌の中でも最善のものは、自発的に感情を表現したものである。これはあらゆる良い歌について考えても事実である。これらの歌は真実の経験に刺激されたものであって、決して出版社や教師を喜ばせるために作ったものではない。私たちは音楽的にも、また他の方面においても子どもに種々の楽しい経験を与えることによって、このような反応を刺激する環境を準備できる。美しい音楽的表現だけでなく、美しい書や物語や詩などで子どもを取り囲むこともできる。

教師は子どもの作った歌に対して、同情ある賢い態度を取らなければならない。最

初は「手をつけない」政策をとってほしい。子どもは、教師があれこれ批評を加える前に何度も実験する機会を与えられなければならない。子どもの最初の歌は、自己の感情の臆病な、そして仮の表現であることもある。大人の批評は、すぐに子どもを当惑させ、歌を打ち壊し、それ以上試みる勇気をくじいてしまうこともある。教師は、子どもの創作的試みを奨励し助ける心構えがなければならない。これに適切な時は、個々の子どもによって違う。

ある子どもは、喜んで自分の歌を他の子どもに繰り返し歌って聞かせる。またその歌を教師が歌ったり、ピアノや他の楽器で弾くことを聞いたりすると喜ぶものである。多くの子どもはまた自分の歌が音符で黒板に書かれるのを喜ぶ。これは音楽を書く方法への興味を、最も自然に刺激する。ある教師はこれらの歌をクラスの歌の本に書き入れている。この年頃の子供達にはよほど満足に思われるようである。子どもの多くは、教師がある聞き慣れた歌の初めを歌って聞かせれば、後の句には自分たちで節を追加することを喜ぶ。教師はクラスに共通な経験をリズムに表現した、短い詩などを提示して、子ども達に創作の機会を与えると良い。例えば、“Down. Down. Yellow and brown. The leaves are Falling over the town.”「下に下にと黄色と鳶色のきれいな木の葉、町の方へ落ちて行く」

これはエリナー・ファージョンの“Joan’s Door”という詩集の一節だが、前述のように用いるのに、大変相応しい。

幼稚園や1年クラスの子供からは、完成した作品は期待できない。多くの歌のように基音に帰らないし、また全音階に当てはまらないかもしれない。しかしその歌は新鮮味を持ち、そのメロディーは保守的な概念しか持たない大人達が真似のできないような音の独創的使用法を表している。教師は子どもの歌の補正に、あまり多くの提案を与えすぎないようにしなければならない。あまりに磨きすぎると歌の全精神や、感じを損ねてしまう恐れがある。大切なことは、子どものあらゆる創作的努力に対して、常にこれを奨励することである。

このような経験の価値は次の通りである。

- 1.子どもは音楽が自己表現に相応しいものであると実感する。
- 2.他の人の歌を鑑賞するのが敏捷になる。
- 3.子どもは計画、決定、選択、結果の判断という、物事を考える実際のプロセスを踏む。
- 4.このような歌の経験は、ある形式やメロディーについての観念を明瞭にする助けとなる。

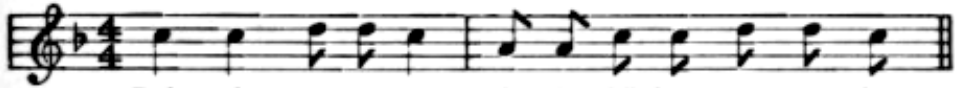
12. 子どもの創作

次のメロディーは、幼稚園の5歳から5歳6ヶ月の子どもが作ったものである。これらは優秀なものではないが、クラスの他の子ども達を創作的努力へと刺激した。初めの3人は、他の歌のリズムパターンに影響を受けているが、メロディーはオリジナルである。



Rose bush, flow - ers grow - ing, Spring - time is here!

BY MARGERY SANFORD.



Rain, rain, go a - way, Lit - tle chil - dren want to play.

BY HARRIET PIERCE.

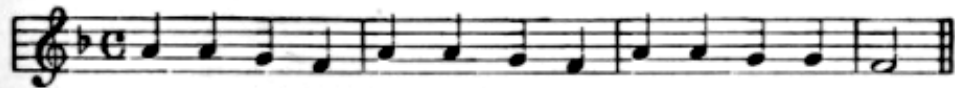


Lit - tle girl, lit - tle girl, Where are you



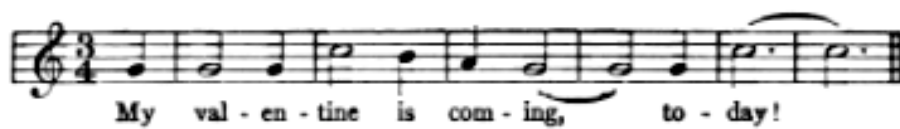
going? I'm going to see my cat and kittens.

BY JEAN KENDALL.



We are glad that Jane is back so we can play with her.

BY RUTH PHILLIPS.

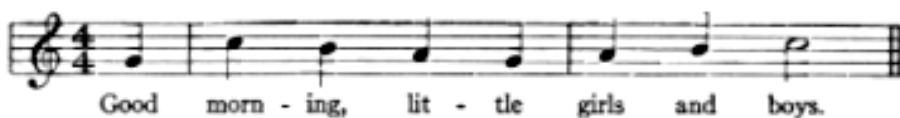


BY DORIS.

To a child returning to school.



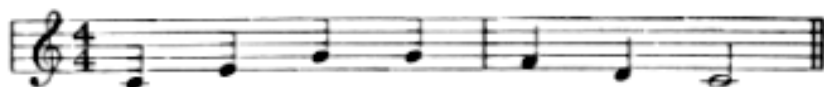
BY MARY GIES.



BY CHARLES DOBBIN.

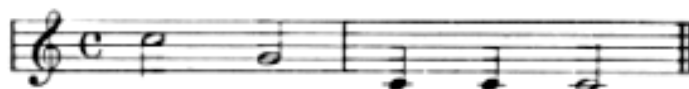
Melody for the Xylophone.

My Mother's Song.



BY BETTY BRISTOL.

Three Melodies for the Glasses.



BY ANDREW HART.



Shall we play?

BY ELAINE.



This is Eas - ter!

BY BARBARA.

13. 進歩の記録と能力の検査

成長した子どもの生まれつきの音楽能力の検査には、シーショアのテストという好材料があるが、小さい子どものために同様のテストはない。もしあったとしても、幼稚園や小学校の子どもには、このようなテストを受けられるだけの必要な準備ができていない。また、音楽的能力の微細に渡る測定は、必ずしも幼稚園児や1年生の音楽発達に必要な不可欠なものではない。音楽の才能ある教師であれば、子どもを2、3のグループに分けるとときには、十分な正確さを持って子ども一人ひとりの音楽の能力を確かめることができるだろう。例えもっと精密なグループ分けができて、一般の教師にとっては2、3組以上にそれぞれ異なった歌の経験を与えることはできない。グループ分けの基礎として、教師はこの章の始めに述べた方法のどれかを用いても良いし、あるいは一番下手な子どもでもできる簡単なものから、一番上手な子どもでも難しいようなグループ別の材料を工夫するのも良い。次のテストは幼稚園や小学校でグループ分けの基礎として多く用いられたものである。この方法は不完全な点も多いが、それでも作った目的は達している。テスト方法は一人ひとりに用いてもよいし、また5、6人の小グループに用いてもよい。外国の子どもに用いるときは、絵を使った方が良い。

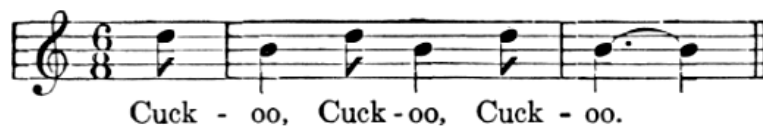
音の高低に関するグループ分けのテスト

子どもの名前 _____ 年齢 _____ 年月日 _____

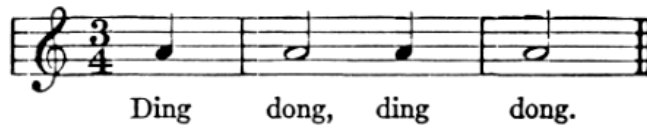
一般摘要

試験者は種々の音の連続を歌いながら、次のようにテストを与える。正確さを保証するために調子笛を用いるとよい。子どもが調子を正確に歌ったときは「正」としてAの印をつける。その調子にもう一息というときはBの印、そして調子からあまり外れるようならばCの印をつける。子どもが一度で正確な音を出した場合を除いては、この8つの音のひとつひとつについて3度ずつやり直しをさせてみるべきである。

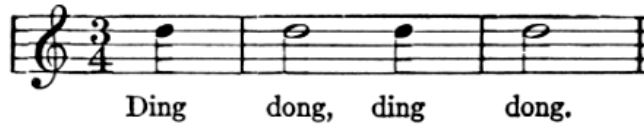
1. 第一の歌は時計の中のかっこう鳥が時を告げに出る時のもの。3時になるとこの鳥はこんな歌を歌います。同じ歌を私に歌ってください。



2. 今度は教会の鐘の音です。私が歌う時によく聞いて、それから同じように私に聞かせてください。



3. 鐘の音は皆同じではないですね。今度の歌を聴いてまた同じように歌ってください。



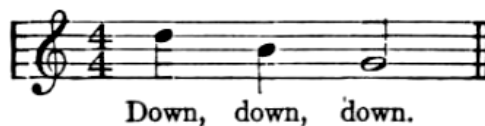
4. ときにはこんな音も出します。これを聞いて同じように歌ってください。



5. 今度の歌は歌っている間にだんだん高くなりますからちょっとはしごを上っているような感じがします。よく聞いて、それから同じように歌ってください。



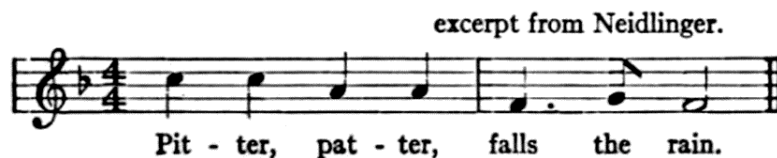
6. 今度のはしごを降りるような歌です。初めによく聞いて、それから同じように歌ってください。



7. お友達に会った時、おはようと言いますが、それを歌にもできます。私がおはようで歌いますから、よく聞いてそれからあなたも同じように歌ってください。



8. 最後の歌は、雨が降る音です。よく聞いて、それから歌ってください。



備考

最初の5つの音の連続、あるいはそれ以上に8つまで合わせることでできる子どもは上位に属し、最初の3つを正確に合わせることもできない、または第一は合わせられるが、第二、第三はもうひといきという子どもは中位に属する。1つの音も正確に合わせられない子どもは下位に属する。

1年間の子どもの音楽的進歩の記録は、両親や音楽主任または上のクラスの教師にも見せられるような形式で取っておくべきである。小学校1年クラスの教師にとっては、自分のクラスの現在の達成を標準にする以外には幼稚園時代の子どもの進歩の確実な記録ほど参考になるものはない。そのような記録は材料や経験の重複を避けるために、次の学年の仕事の基礎として使われなければならない。この記録はクラスの教師自身が最も価値があると思った音楽的達成の記録を含むべきである。特に次のような告知において有用である。

1. 上中下のグループの名前と人数
2. その上中下の3グループに用いられた歌の材料
3. クラスの者が出席した音楽会と見学
4. 器楽—一年間に次のことに使用されたもの
 - a. リズム活動のため
 - b. 音楽鑑賞のため
 - c. 楽器の合奏のため